



Yoneda Hiroshi

# 元気のいい中部から 巻き起こす開発教育

日本を代表する企業が集まり、中部国際空港の開港や、愛・地球博(2005年日本国際博覧会)の開催などで国際化が進む中部地域は、国内で今、最も勢いがある。在日外国人も多く、多文化共生が切実な課題となる中、JICA中部はどのように開発教育支援を推進しているのか。

## 米田博

JICA中部所長

国境を越えるグローバル化だ。などと悠長なことを言っているだけ。開発教育という、日本から離れた途上国の話だと思われがちですが、中部地域では、まさに自分たちの身近な課題を考える教育でもあるといえます。

そこで、JICA中部は開発教育支援に力を入れ、さまざまなプログラムの拡充・改善を図ってきました。とはいえ、私は昨年8月に着任したばかりですから、現在進行中の事業は、前任所長や所内の連携促進チーム、国際協力推進員の皆さんの功績です。その成果を、この場をお借りして報告したいと思います。

### 地域との連携を強化

JICA中部の開発教育支援は、主に2つのカテゴリーに分けられま

す。一つは催し物・イベント。例えば(財)愛知県国際交流協会(財)名古屋国際センター、JICA中部の共催による「ワールド・コロボ・フェスタ」は、中部地域最大規模の国際交流・協力イベントです。昨年はNGOをはじめ100以上の団体が参加し、名古屋市の中心街に設置された会場には6万人近くが集まりました。多くの人が楽しみながら国際理解を深められるので、非常に効果の高い事業です。

もう一つは、小中学生に直接授業を行う方法です。JICA中部にやって来た子どもたちに施設や活動を説明するプログラムと、さらにインパクトの大きい「国際協力出前講座」というプログラムがあります。青年海外協力隊や専門家の経験者、海外経験のあるJICA職員が要望のあった学校に向き、自身の体験

を話したり、セミナーやワークショップを開いて子どもたちに疑似的に国際体験してもらいます。

また、こうした開発教育のセミナーやワークショップの手法を大成したものが「教室から地球へ 開発教育・国際理解教育虎の巻」です。これは、地域のNGOや教育関係者、松田教男前所長をはじめJICA中部のスタッフなどが研究会を立ち上げて、調査から執筆、出版まで約3年を費やして製作されたものに用いられています。

そのほかにもJICA中部は、地域のNGOや教育機関と連携しながら、さまざまな開発教育支援を行っています。また、09年に移転予定の新JICA中部は、市民参加・開発教育の拠点となる「地球ひろば」の機能を備え、「国際協力を日本の文

### 中部で開発教育が盛んな背景

開発教育の必要性は全国的に高まっていますが、ここ中部地域は特にその傾向が強いと思います。その背景には、中部地域が経済的に非常に元気がいいことがあります。愛知にはトヨタ、三重にはホンダやシャープ、静岡にはヤマハやスズキといった大企業を中心となって地域経済を牽引しています。

こうした勢いのある企業や関連する裾野の製造業では、多くの外国人が雇用され、中部地域の外国人登録者数やその増加の速度は、全国的に見ても高いのです。現在、約200万人の在日外国人のうち35万人がこの地域に居住しています。そうすると、外国人コミュニティも形成されるわけですが、例えば豊田市では、日系ブラジル人のコミュニティと日本人コミュニティとの間で、こまごまとした問題が起こっているところもあるようです。また、ブラジル人学校も満杯になり、公立学校に通う子どもが増えています。が、言葉の問題があるので、ポルトガル語の補助員を付けるなどの応急対策をとる学校もあります。

このように、中部では外国人との共生が現実的な問題として迫っています。「ヒト、モノ、カネ、情報が」に「していく流れを中部から巻き起こしたいと考えています。

ただ、今後の開発教育のあり方についてはもっと議論が必要だと思います。というのは、先ほど挙げた出前講座ですが、JICA中部は05年度に約250件を実施しました。それはスタッフが大変な思いをして行った実績です。しかし、その講座を受けた生徒数は2万1769人。一方、対象4県の小中学生の総数は約176万人ですから、全体の1.2%にしかならず、及ぼしていないことになりました。そこで、考えてしまおうのが、われわれはどの程度まで開発教育にかかわっていくべきなのか、あるいは、政府がどのような教育を全国的に展開するのがいいのか、ということです。そういった議論がもっと日本の中でなされるべきだと思います。

### 国際的な潮流から見る日本の援助

私自身も出前講座に出かけることがあります。昨年11月、名古屋市内の中学校から「JICAの専門家やボランティアの活動については折りあるごとに聞いているので、次は途上国援助の全体の枠組みについて生徒に話してほしい」という要望があり、私が話すことになりました。対象は中学3年生。108人の生徒たちが体育館で私を待っていてくれました。

私は、2001年の9.11テロが世界の援助額を劇的に変化させたことを話しました。つまり、あの事件が、豊かな先進国だけで繁栄を続けることはできず、途上国の貧困削減の必要性を各国に認識させ、その結果、英仏独の欧州勢は2010~15年に、ODAを対GDP比0.7%まで増加すると公約していること、他方、日本はそこまで積極的でないことを説明したのです。

話を聞いた生徒の一人が、こんな感想をくれました。

「日本は世界で2番目に豊かなのだから、相応の援助をすべきだと思う。確かに日本の財政は苦しいけれど(中略)あまり必要ないお金を削って援助にまわせば、もっとたくさんの国を助けられると思う」

途上国の実情だけでなく、国際的な大きな流れと援助の関係を伝えることで、より広い視野で国際協力の意義を考えてくれると思うので、今後もこうした講座をしていきたいですね。



昨年10月28・29日に開催された「ワールド・コロボ・フェスタ2006」の様子。このイベントは、多くの市民が楽しみながら国際理解を深める好機になっている